

## 別記様式第6

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	張 備
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation)			
田村俊子研究—女性雑誌『女聲』を中心に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	准教授	下岡 友加	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	有元 伸子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	久保田 啓一	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	川島 優子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	山崎 眞紀子 (日本大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、日本近代を代表する女性作家・田村俊子 (1884-1945) の日本・北米・中国という三つの時期における言説を対象とし、俊子が晩年中国において発刊した『女聲』編集にたどりつくまでの思想の内実と変遷を論じたものである。特に、中国語の媒体である雑誌『女聲』の分析に考察の重きを置く。</p> <p>第I部は中国渡航以前の田村俊子の言説を考察対象とする。 第一章では、俊子の初期小説、評論、エッセイが「女性の恋愛・結婚・家庭」「女性のセクシュアリティ」「女性の自立と職業」をテーマとし、家父長制度・男性中心主義を批判し、強い女性性と義務に反抗する女性を繰り返し描いていることを論じる。 第二章では、俊子の文壇デビュー小説「あきらめ」における女学生の表象から、女性の自立及び男女の対立の様相を考察する。同じく女学生を扱った同時代小説と比較することで、「あきらめ」における女性教育制度への批判を読み取る。 第三章では、俊子が北米へ渡ってから中国渡航前までの時期に発表された論説 (『大陸日報』『新世界』掲載) を考察する。俊子が新しく獲得した視点として女性解放運動、婦人会の設立、移民と排日の問題への関心を指摘し、「人格の力」「強い意志」「智識」など非暴力の手段を提唱しているとする。 第四章では、俊子が北米から日本へ帰国した直後に発表した小説「カリホルニア物語」「残されたもの」から、人種・階級・日系移民などの問題がいかに関与し、その具体を論じた。</p> <p>第II部は雑誌『女聲』を考察対象とする。 第五章では、雑誌『女聲』に関する先行研究と雑誌刊行目的・構成・内容について整理を行う。 第六章では、後期の『女聲』が日本の文学作品を紹介し始めた理由を大東亜文学者大会の開催と女聲社の人事変動から論じる。選ばれた作品は単純に大東亜共栄を主張するものではないが、たとえば火野葦平「怪談宋公館」は日本軍人の勇壮を肯定する小説として読まれる性格も持ち、ここか</p>			

ら、俊子の軍国主義への妥協を指摘する。

第七章では、投稿者である中国共産党地下黨員たちと『女聲』の関係を検討する。俊子は雑誌運営を通じて地下黨員たちに公に発信できる場を提供し、間接的な協力を行ったとする。

第八章では、『女聲』の「信箱」欄での読者の投稿と編集者による回答を分析する。「信箱」の投稿内容は恋愛結婚、自立と就職、勉学に関する相談が一番多く、北米へ渡る以前から俊子が関心を持っていた女性問題と重なる。編集者である俊子は自身の女性解放思想を中国女性たちに発信し続け、読者は「信箱」欄を通して他の女性たちと意見を交換し、交流する。このような「信箱」欄の在り方に『女聲』発刊の主旨が実現したと論じる。

第九章では、『女聲』掲載の婦人論を分析した。「婦女回家」「良妻賢母」を巡る議論において『女聲』には保守派と革新派の意見が混在する。『女聲』は同じく上海発刊の『婦女生活』『女子月刊』などの革新派（急進派）の雑誌と比べると進歩的とは言えないが、多角的な視点を読者に提示したとの位置づけが行われた。

本論文は雑誌『女聲』の分析を通じて、田村俊子研究において最も手薄であった中国時代の彼女の活動とその意義を明らかにした点に特色を持つ。背景となる時代、同時代人との関係性など目配りすべき課題も少なからず残されているが、初期・中期の俊子の言説とも接続することで、彼女の思想の変遷について総合的に追究することを試みており、意欲的かつ独創性の高い論文と評価することができる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)